

■プロローグ：老いたる支配者の「有閑」なる悪戯 大陸を統一し、権力の頂点に君臨した最強の老王。退屈を嫌う暴君が余生に選んだ遊戯は、かつて自身に抗った「高潔な女たち」を絶望の淵へと突き落とし、その心身を雌犬へと作り変える残酷な征服劇だった。

■ターゲット：汚されるために生まれてきた高貴なる獲物たち

1. 誇り高き敗戦国の王妃：民衆の前で「公開調教」を施され、肉体の快楽に屈して自ら隷属を請うまでの陥落ログ。
2. 慈愛の微笑みを湛える聖女：神への信仰を老王への性愛へと「マインドコントロール」により書き換えられ、肉便器へと堕ちる。
3. 剛毅なる女騎士団長：無敵の武勇を誇った肉体が、老王の秘薬と調教によって「雌犬」として開発し尽くされる。

■作品の特徴

- ・圧倒的な筆致で描かれる「没落」と「墮落」の美学。
- ・心理描写を極めた「精神崩壊」と、逃げ場のない「支配」の快楽を徹底追求。

老王の征服録 ～敵国女将軍、犬化調教～

## 第1章：敗北の女将軍

---

玉座の間は、静まり返っていた。

---

床に跪く女がいる。

縛られている。

両手を背中で縛られ、膝をつかされている。

鎧は剥がされ、破れた軍服だけが身を覆う。

白い肌に、無数の傷。

血が、軍服を赤黒く染めている。

それでも――

その目は、死んでいなかった。



李雪蘭（り・せつらん）

隣国・南楚（なんそ）にて最強と謳われた女将軍。

齢 21 歳にして、数千の兵を率い、自ら陣頭で戦線を切り開き、数倍もの敵軍を打ち破る。

皇国の守護神と謳われた美しき戦乙女。

しかし今、長い黒髪は乱れ、顔には泥と血が付着している。

それでも、美しい。

整った顔立ち。

切れ長の瞳。

引き締まった身体。

だが何より――

その目に宿る、反骨の炎。

その姿を玉座から、男が見下ろしている。

「老王」と呼ばれた男。

大陸の覇王。

どこからやってきたのかはわからない。

かつて、外洋の極東の島国にて戦い続けた、名もなき少年兵であったという。

大陸に渡り、その暴力性と武威で瞬く間に周辺勢力を併呑し、一気に大陸随一の勢力へと成り上がった。

勝利して、支配する。そのみを信条に、次々と男は屈服させ、美女はなぶり、その国の文化と技術を自らのものとする。

そうして膨れ上がった、老王の帝国。

「ふむ」

白髪混じりの長めの髪の間隙から覗く眼光は、鷲のように鋭い。

豊かな髭。

筋骨隆々の、虎のような肉体。

年齢は60を超えているはずだが、その身体から発せられる圧力は、若き戦士のそれを遥かに凌駕する。

「……李雪蘭」

低く、重い声。

雪蘭の肩が、わずかに震えた。

「……」

だが、顔を上げない。

睨みつけたまま、黙している。

：「顔を上げろ」

命令口調。

だが、雪蘭は動かない。

「……ほう」

---

老王の口元に、わずかな笑みが浮かぶ。

「まだ折れていないか」

老王は、ゆっくりと立ち上がった。

玉座から降りる。

一歩、また一歩。

雪蘭に近づいていく。

雪蘭の身体が、わずかに緊張する。

だが——目は逸らさない。

老王が、雪蘭の目の前まで来た。

見下ろす。

それほどの巨躯ではない。しかし、そのオーラは大きさを2倍にも、3倍にも

見せる。

圧倒的な威圧感。いや、むしろ”雄感”、とでも言ったほうが正しかった。

「貴様は、俺に何を問う？」

「……殺せ」

初めて口を開いた。

声は、掠れている。

だが、芯は通っている。



「殺せ、か」

老王は、雪蘭の顎を掴んだ。

「っ……！」

強引に顔を上げさせられる。

老王と、雪蘭の目が、至近距離で交わる。

「殺す殺さぬは俺が決めること」

「……貴様の趣味など、知ったことか」

雪蘭は、唾を吐いた。

老王の顔に、かかる。

シャインという、乾いた金属音がした。

周囲の兵士たちが、剣を抜く。

だが――

「下がれ」

老王は、平然と手を上げた。

兵士たちが、剣を収める。

老王は、顔についた唾を、ゆっくりと拭った。

「……いい目だ、実に、な」

「……何？」

「俺は、貴様のような女が好きだ」

老王は、雪蘭の頬を撫でた。

「触るな……！」

雪蘭は身体をよじって抵抗する。

だが、縛られた身体では限界がある。

「戦場で見た。貴様の剣捌き、見事だった」

老王の声が、低く響く。

「俺の兵を、三十人は斬った。のべで言えば百は下るまい」

「……もっと斬ってやりたかった。残念だ」

憎悪を込めて、雪蘭は言い放つ。

「ああ、そうだろうな」

老王は、笑った。

「だが、貴様は負けた」

「……っ」

「貴様の軍は壊滅した」

「貴様の国は、滅んだ」

「貴様の王は……ふふっ」

---

一つ一つ、事実を突きつけながら、老王が不気味に笑う。

「男子の究極の悦楽を知っているか」

老人とは思えない、声の艶。

「貴様のような絶世の美女を、貴様が護りたかった者達の目の前で、犯し、辱め、戮り、絶望に染まる顔を眺めながら、全てを灰燼に帰すことだ」

雪蘭の唇が、震えた。

だが——目は、まだ燃えている。

「貴様は、俺のものだ」

「……違う」

「何？」

「私は……誰のものでもない……！」

叫ぶように、言い放つ。

「……そうか」

老王は、雪蘭の髪を掴んだ。

「っ……！」

引き上げられる。

痛みに、顔が歪む。

「ならば、俺が教えてやろう」

老王の目が、鋭く光る。

「貴様が、誰のものなのか」

「……貴様など……！」

「楽しみだ」

老王は、雪蘭の髪を離した。

雪蘭が、床に倒れ込む。

「牢に入れろ。三日、飯も水もやるな」

兵士たちが、雪蘭を引き立てる。

「……殺せ……！ 殺せっ……！」

叫びながら、引きずられていく雪蘭。

老王は不敵に笑い、玉座に戻った。

「……面白い女だ」

老王の目が、愉悦に細まる。

「殺せえええ……っ！！！！」

玉座の間に、雪蘭の叫び声が響く。

そして――

静寂が戻った。

## 第2章：老王の品定め

三日後。

牢の扉が開く。

兵士たちが入ってくる。

「立て」

雪蘭は、壁に背を預けたまま動かない。

「立てと言っている」

兵士が、雪蘭の腕を掴む。

「っ……」

強引に引き上げられる。

足に力が入らない。

兵士たちに支えられ、牢から引きずり出される。

廊下を歩く。

長い廊下。

石造りの壁。

松明の灯り。



やがて――

廊下の景色が変わった。

石造りから、木造へ。

簡素な松明から、精巧な燭台へ。

絨毯が敷かれている。

壁には、絵画。

(……ここは……)

雪蘭は、周囲を見回す。

(……宮殿の……奥か……)

さらに歩く。

やがて――

大きな扉の前に辿り着く。

扉が開く。

中は――

雪蘭は、息を呑んだ。

広い部屋。

いや、広間と言うべきか。

天井は高く、西海諸国風のシャンデリアが吊るされている。

床には、真紅の絨毯。

壁には、金糸の刺繍が施された布。

部屋の奥には――

大きな寝台。

天蓋付き。

絹の布が、垂れ下がっている。

そして――

部屋の中央には、大きなテーブル。

その上には、食事が並んでいた。

焼かれた肉。

色とりどりの果物。

湯気の立つスープ。

そして、銀の水差し。

雪蘭の喉が、ゴクリと鳴る。

テーブルの隣には――

絹の衣装が置かれていた。

鮮やかな赤。

金糸の刺繍。

宝石が縫い付けられている。

(……なんという……)

雪蘭は、圧倒される。

(これが……老王の……)

部屋の奥、窓際に――

湯殿があった。

大きな桶。

湯気が立ち上っている。

花びらが浮かべられている。

(……この豪奢さ……)

雪蘭の心に、恐怖が芽生える。

(これが……老王の権勢……)

その時――

「お待ちしておりました」

女の声。

雪蘭は、振り向く。

部屋の隅から、女が現れた。

若い女。

年は、雪蘭と同じくらいか。

美しい顔立ち。

長い黒髪。

そして――

雪蘭は、目を見開いた。

(……あの、紋章……)

女の衣装に、見覚えのある紋章が刺繍されている。

(……隣国、趙の……)

(……貴族の……)

「……貴方は……」

雪蘭は、掠れた声で尋ねた。

「……趙の、柳家の……」

女は、微笑んだ。

「ご明察です」

女は、優雅に一礼する。

「柳梅香と申します」

「……そんな……」

雪蘭は、愕然とする。

「貴方までもが……」

柳家は、雪蘭も知っている。

趙国の名門貴族。

その娘が――

ここにいる。

「……なぜ……」

「なぜ、でしょうね」

梅香は、静かに笑う。

「さあ、こちらへ」

梅香は、湯殿の方を指す。

「……」

雪蘭は、動けない。



だが――

兵士たちが、雪蘭を押す。

「っ……」

梅香の前に、押し出される。

「では、お下がりください」

梅香が、兵士たちに言う。

兵士たちが、退出する。

扉が閉まる。

部屋には、梅香と雪蘭、二人きり。

「さあ、お召し物を」

梅香が、雪蘭に近づく。

「……私が、自分で……」

「いえ、私がお手伝いいたします」

梅香の手が、雪蘭の破れた軍服に触れる。

「っ……」

「お願いします。抵抗なさないで」

梅香の声は、優しい。

雪蘭は、唇を噛む。

(……仕方ない……)

雪蘭は、梅香に身を任せた。

破れた軍服が、脱がされる。

白い肌が、露わになる。

傷だらけの身体。

梅香は、眉一つ動かさない。

ただ、静かに雪蘭の身体を湯殿へ導く。

「どうぞ」

雪蘭は、桶に身体を沈める。

「……っ」

温かい。

三日ぶりの温もり。

雪蘭の身体が、震える。

梅香は、布を手取る。

「お背中、お流いたします」

梅香の手が、雪蘭の背中に触れる。

優しく、丁寧に。

汚れを落としていく。

「……」

雪蘭は、黙っている。

(……なぜ……)

心の中で、問いかける。

(なぜ、貴方のような高貴な方が……)

「雪蘭様」

梅香が、静かに呼びかける。

「……何だ」

「戦士の誇りだけが、人生の正解とは限りません」

「……？」

雪蘭は、振り向く。

梅香は、微笑んでいた。

「女の悦びもまた……」

梅香の手が、雪蘭の肩に触れる。

「……存在するのです」

「……っ」

雪蘭は、梅香を見つめる。

梅香の身体。

身体が透けるほどの、上等な薄衣。

素肌に身につけられた、宝飾品。

その扇情さに――

雪蘭は、思わず顔を赤らめ、目を逸らした。

「……っ」

「ふふ」

梅香は、小さく笑う。

「さあ、お上がりください」

雪蘭は、桶から上がる。

梅香が、布で身体を拭く。

そして――

絹の衣装を、雪蘭に着せる。

赤い絹が、雪蘭の身体を包む。

柔らかい。

滑らかな感触。

梅香は、雪蘭の髪を整える。

丁寧に、櫛を入れる。

そして――

宝飾品を、雪蘭の身体につける。

首飾り。

腕輪。

そして――

足首に、金のアンクレット。



チャリン、という音。

「……これは……」

「老王様の印です」

梅香は、静かに答える。

「……」

雪蘭は、足首を見下ろす。

金のアンクレット。

美しく、そして――

鎖のように見える。

「さあ、お食事を」

梅香は、テーブルを指す。

雪蘭は、テーブルに座る。

梅香が、スープを注ぐ。

肉を切り分ける。

果物を皿に盛る。

「どうぞ」

雪蘭は、スープを口にする。

「……っ」

美味しい。

身体に、染み渡る。

雪蘭は、無言で食事を続けた。

梅香は、静かに見守っている。

やがて――

食事が終わる。

「お召し上がりになりましたね」

「……ああ」

「では、老王様がお待ちです」

「……っ」

雪蘭の身体が、緊張する。

「こちらへ」

梅香は、部屋の奥の扉を指す。

雪蘭は、立ち上がる。

足首のアンクレットが、チャリンと鳴る。

梅香に導かれ、雪蘭は扉に向かう。

扉が開く。

中は――

さらに広い部屋。

玉座。

そして――

玉座に、老王が座っていた。

雪蘭は、部屋に入る。

梅香が、扉を閉める。

部屋には、老王と雪蘭、二人きり。

老王は、雪蘭を見る。

ゆっくりと、上から下まで。

「……見違えたな」

老王の声が、低く響く。

「美しいぞ」

老王は、立ち上がった。

玉座から降りる。

雪蘭に、近づいてくる。

「……」

雪蘭は、身体を強張らせる。

老王が、雪蘭の前に立つ。

見下ろす。

「三日前とは、別人だ」

老王の手が、雪蘭の頬に触れる。

「っ……」

「戦場の将軍が——」

老王の指が、雪蘭の顎をなぞる。

「今は、美しい女だ」